

三田市

福島・長町遺跡

(二) 武庫川水系大池川河川改良事業に伴う発掘調査

2014(平成26)年3月

兵庫県教育委員会

三田市

福島・長町遺跡

(二) 武庫川水系大池川河川改良事業に伴う発掘調査

2014(平成26)年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、兵庫県三田市福島に所在する、福島・長町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、(二)武庫川水系大池川河川改良事業に伴うもので、兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部を調査機関として、平成23（2011）年度に実施した。また整理事業は、同事務所の委託により、平成25（2013）年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。
3. 調査の推移
(発掘作業)
試掘調査 平成23年4月11日・12日・14日
実施機関：兵庫県立考古博物館
本発掘調査 平成23年6月21日～平成23年7月8日
実施機関：兵庫県立考古博物館
工事請負：畠内建設株式会社
(出土品整理作業)
平成25年4月1日～平成26年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
4. 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 渡辺 畏と久保弘幸が担当した。
5. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
6. 遺物写真撮影は、㈱クリアチオに委託して実施した。
7. 本書中の図で示した方位は、調査地点における磁北による。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、大本朋弥氏（兵庫県まちづくり技術センター）よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい。
9. 出土木製品の樹種同定は㈱古環境研究所に、放射性炭素による年代測定は㈱加速器分析研究所に委託して実施し、その成果は本書の第4章に収録している。
10. 本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色誌』によっている。
11. 挿図中で用いた遺構の略称は、下記のとおりである。
P：柱穴　SK：土坑　SD：溝　SX：不明遺構

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査の概要	5
第3章 遺構と遺物	
第1節 本発掘調査区の層序と遺構面の位置	8
第2節 遺構と遺物	11
第4章 自然科学的分析	
第1節 福島・長町遺跡における樹種同定	21
第5章 結語	28

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 福島・長町遺跡と周辺の遺跡	4
第3図 調査区位置図 (1/500)	6
第4図 調査区層断面図 (1/500)	9
第5図 調査区平面図 (1/200)	10
第6図 旧河道 (SD-1) 断面図	11
第7図 本発掘調査出土土器	12
第8図 遺構検出面上の土器出土状況	13
第9図 本発掘調査・確認調査出土石器	14
第10図 本発掘調査・確認調査出土木製品 (1)	15
第11図 本発掘調査・確認調査出土木製品 (2)	16
第12図 本発掘調査・確認調査出土木製品 (3)	17
第13図 確認調査トレンチ出土土器	19

表 目 次

第1表 福島・長町遺跡調査一覧表.....	5
第2表 収録遺物一覧表.....	20
第3表 福島・長町遺跡における樹種同定結果.....	21

写真目次

写真1 福島・長町遺跡の木材 I	24
写真2 福島・長町遺跡の木材 II	25
写真3 福島・長町遺跡の木材 III	26
写真4 福島・長町遺跡の木材 IV	27

写真図版目次

写真図版1 調査前の状況（東から）	
本発掘調査前の状況（西から）	
写真図版2 確認調査トレンチ1	確認調査トレンチ2
確認調査トレンチ3	確認調査トレンチ6
確認調査トレンチ7	確認調査トレンチ9
確認調査トレンチ10	確認調査の状況
写真図版3 本発掘調査区東半部（1区）全景（西から）	
本発掘調査区西半部（2区）全景（東から）	
写真図版4 調査区北壁断面	
調査区南壁断面	
写真図版5 1区旧河道（SD-1）	
2区旧河道（SD-1）	
写真図版6 遺構検出面上器出土状況	
遺構検出面上器出土状況（下部）	
写真図版7 旧河道（SD-1）内の木造構造物	
木造構造物細部	
木造構造物細部	
写真図版8 機械掘削状況	
人力調査状況	
人力調査状況	
写真図版9 木造構造物検出状況	
断面図化状況	
埋め戻し状況	
写真図版10 出土遺物（土器）	
写真図版11 出土遺物（土器）	
写真図版12 出土遺物（土器）	
写真図版13 出土遺物（石器）	
写真図版14 出土遺物（木製品）	
写真図版15 出土遺物（木製品）	

報告書抄録 (Outline of the Report)						
ふりがな	ふくしま・ながまちいせき			About the Report		
書名	福島・長町道路発掘調査報告書			Excavation report of the Fukushima-Nagamachi archaeological site		
副書名	(二) 武庫用水系大池川河川改良事業に伴う発掘調査報告書			Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol.459		
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告			The Author/Editor : Noboru Watanabe Hiroyuki Kubo		
シリーズ番号	第459号					
編著者名	渡辺 昇・久保弘幸					
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 理文化財調査部			Hyogo Construction Technology Center for Regional Development Archaeological Research Department Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan		
所在地	兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 (兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561					
発行年月日	平成25(2013)年3月31日			Publication : March 25, 2013		
所収道路名	所在地	コード		北緯 東経		
福島・長町道路	三田市福島	市町村	遺跡番号	northern latitude east longitude		
		28219	200149	34°54'48" 135°12'28"		
道路調査番号	調査の種別	調査期間		調査原因		
2011193	本発掘調査	2011年5月14日～2011年8月26日		(二) 武庫用水系大池川河川改良事業		
道路の種別	集落道路	主な遺構		溝・柱穴・旧河道		
道路の時代	縄文時代 弥生時代 古墳時代 鎌倉時代	主な遺物		縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・ 木製品・金属器		
要約	古墳時代の柱穴および旧河道が検出された。また、縄文時代晚期・弥生時代中期・古墳時代前期・鎌倉時代の遺物包含層より、各々、当該時期の遺物が出土した。					
Abstract	In the site; pit holes and a former river channel that belong Kofun age were excavated. In addition, the earthenware of late Jomon period, Yayoi period, Kofun period, and Kamakura period were excavated.					
Address of the site	Fukushima, Sanda, Hyogo pref. Japan		Date of the Excavation	14. May, 2011 ~ 26. Aug. 2011		
Category	Settlement, Wetland site		Archaeological Features	Pit holes, Former river bed		
Period	Jomon period, Yayoi period, Kofun period, Kamakura period		Main Relics	Jomon pots, Yayoi pots, Haji wares, Sue wares, Wooden remains		

第1章 遺跡の位置と環境

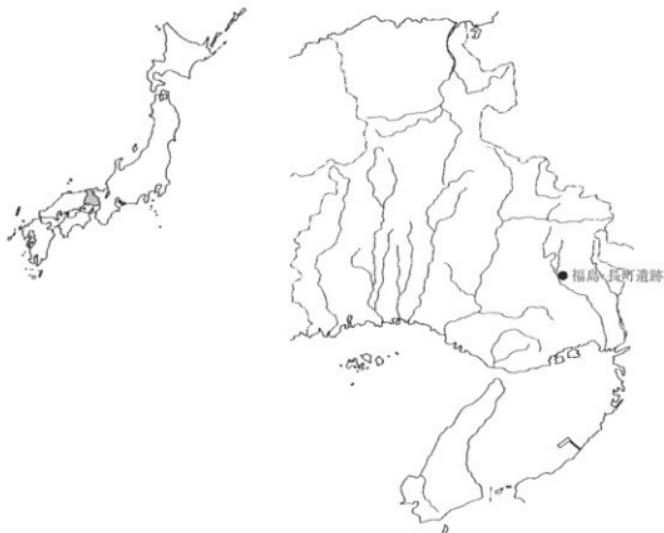
第1節 地理的環境

福島長町遺跡が所在する三田市は、兵庫県の南東部に位置し、北は篠山市、南は神戸市・宝塚市、西は三本市にそれぞれ接している。神戸市までは、直線距離で約30kmを測る。

篠山盆地に発する武庫川は、南流して三田市域に至り、広い盆地の中央を流下する。さら宝塚市と神戸市の境界付近に続く狭隘な渓谷地帯を抜けて、伊丹市・尼崎市・西宮市付近を貫いて大阪湾へ注ぐ。三田市域では流域に沖積平野を形成しており、豊かな田園地帯として利用されてきた。

三田市は、律令制下では摂津国に属していることでもわかるとおり、古くから、大阪湾周辺との結びつきが強かった地域である。この事情は現在も変わっておらず、北摂ニュータウンの建設などによって、阪神間から多くの転入者があったことから、いっぽう、大阪圏との結びつきは強まっていると言えるだろう。

福島長町遺跡は、武庫川左岸に合流する支流である、大池川の合流点から南側に位置している。遺跡は、東側から延びる微高地上にあって、三田市教育委員会によっておこなわれた発掘調査によって、弥生時代中期の集落遺跡が存在することが明らかになっている。



第1図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

三田市域では、1980年代以降のニュータウンや工業団地に代表される開発事業により、多数の遺跡が見いだされ、発掘調査が行われてきた。以下では、福島・長町遺跡と同じ武庫川本流域にある遺跡を中心に概観してみよう。

【後期旧石器時代】

三田市域最古の遺跡であり、市域で唯一、石器群としてのまとまりが確認されているのが溝口遺跡である。武庫川支流の相野川右岸の丘陵上に位置し、ナイフ形石器・台形石器・刃部磨製石斧が出土している。地層の堆積は薄いが、石器の型式学的な検討から、始然Tn火山灰層下位に比定されている。これとほぼ同時期と考えられるのが有鼻遺跡で、やはりナイフ形石器・台形石器・刃部磨製石斧等が出土しているが、これらは弥生時代の遺物包含層中に遊離した状態であった。

これらのほかに、天神遺跡でナイフ形石器が、亀ヶ森遺跡で翼状剥片が採集されており、後期旧石器時代後半期に属するものと推定されている。

【縄文時代】

武庫川本流域では、これまでに12遺跡が知られている。その内容を見ると、草創期には3遺跡が見られ、早期にも武庫川支流の青野川流域で3遺跡が知られているのに対し、明確に前期に属する遺跡は、これまでのところ三田市域では知られていない。中期についても、わずかに1遺跡が知られるのみである。後期になると遺跡数は増大し、武庫川本流域だけでも5遺跡が見られるようになる。晚期には遺跡数がふたたび減少し、今回報告する福島・長町遺跡を含めて2遺跡が知られているのみである。

草創期：平方遺跡、有鼻遺跡、下西山遺跡がある。いずれも丘陵上に位置しており、有舌尖頭器が出土しているが、残念ながらすべて後世の遺物包含層中に遊離した状態での出土であるため、遺跡の規模や構造、共伴する土器などに関する資料は得られていない。ほかに、支流の青野川流域の北台遺跡でも有舌尖頭器が出土している。

早期：武庫川本流域には当該期の遺跡は知られていないが、支流の青野川流域で、泓遺跡・北台遺跡・溝向遺跡3遺跡がある。泓遺跡では神宮寺式、他の2遺跡では黄島式の押型文土器が出土しており、早期でも前半に属する遺跡である。

中期：武庫川本流に面した丘陵の裾部に、梶下ヶ谷遺跡がある。発掘調査によって27基の落とし穴が検出されており、周辺の遺物包含層より、船元I式土器が出土していることから、中期前半、ないしはこれに隣接する時期の遺跡と推定されている。

後期：遺跡数は多く、桑原遺跡で四ッ池・広瀬式土器、西安・中筋遺跡、有鼻遺跡で北白川上層I式土器、加茂・六地蔵遺跡で北白川上層II式土器、下井沢遺跡で元住吉山I式土器が、それぞれ出土している。

晚期：遺跡数は減少し、本流域では対中遺跡で晩期末の長原式土器が知られている程度であり、本報告書に記載した福島・長町遺跡は武庫川本流では2例目である。

【弥生時代】

三田市域では、弥生時代前期前半の遺物は知られておらず、後半～末の土器を出土する遺跡がいくつか知られているが、当該時期の遺構などはほとんど見出されていない。中期前葉（II期）には武庫川本流域に数遺跡が成立するが、後続する中期中葉（III期）の遺跡数にも大きな変化は見られない。中期後葉（IV期）になると、遺跡数は爆発的に増大し、20遺跡近くが市域に成立する。後期前葉には、遺跡数が減少するが、後期中葉～後葉後半にはふたたび遺跡数の増加が見られ、その多くが古墳時代初頭（庄

内式期）へと継続するようである。

前期：武庫川本流域では、対中遺跡、貴志遺跡、三輪・餅田遺跡、三輪・宮ノ越遺跡などで、前期後半～末の土器が出土している。

中期前葉：古城遺跡はこの時期に成立し、中期末まで継続する。三輪・餅田遺跡、三輪・宮ノ越遺跡もこの時期に成立し、三輪・餅田遺跡は中期末まで継続する。

中期中葉：中期前葉の遺跡に加えて、天神遺跡、貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡、福島・長町遺跡が成立する。

中期後葉：遺跡数が急増する時期である。上述の遺跡に加え、下深田遺跡、下深田・坂ノ下遺跡、下深田・大山遺跡、奈カリ与遺跡、平方遺跡、西山遺跡、中山西遺跡、奈良山中央公園遺跡、有鼻遺跡など、多数の遺跡が武庫川本流域に成立する。遺跡の規模も大きなものが多い。

後期：後期前葉には、遺跡数は一気に減少し、わずかな資料しか見られなくなる。

【古墳時代】

三田市域では、前期～中期の古墳は知られておらず、集落遺跡も弥生時代後期～古墳時代前期の川除遺跡をあげる程度である。後期になると集落遺跡、古墳ともに多数が成立しており、三田市域をめぐる社会状況が急激に変化したものと考えられる。須恵器窯跡も、兵庫県下では最も早い5世紀後半段階に開始されている。

前期：三田市域からはやや外れるが、神戸市と三田市の市境にある八景丘陵に、4世紀代の前方後円墳である、塙北東古墳（全長35m）が知られている。三角縁神獣鏡1面（三角縁一仏三神四獸鏡）が出土している。三田市域では、川除遺跡が弥生時代後期～古墳時代前期の拠点的集落として知られており、弥生時代末の円形周溝墓2基も検出されている。

中期：三田市域では当該期の古墳は知られておらず、集落遺跡も貴志・下所遺跡でわずかな堅穴住居跡が見いだされるのみである。

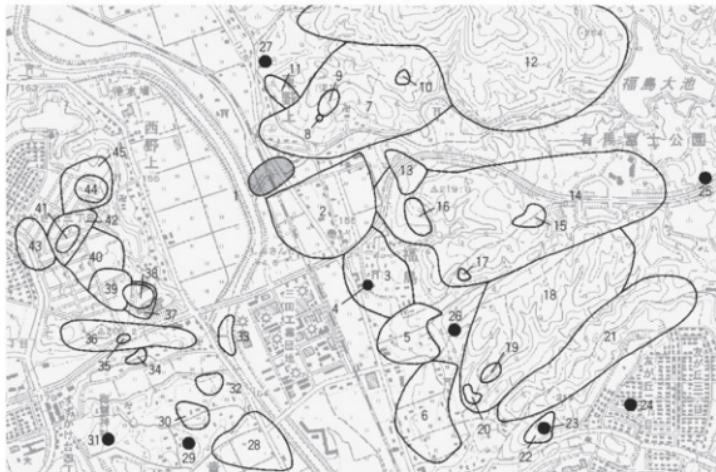
後期：古墳を含む遺跡数が急増する。武庫川本流域でも、桑原遺跡、川除遺跡、貴志・下所遺跡、貴志・樋戸遺跡、平方西遺跡、などの集落遺跡が成立するほか、流域の段丘上、丘陵上に古墳（群）が多数成立する。

後期前半の古墳としては、武庫川左岸の萬代古墳群第2号墳、右岸の西山古墳群第6号墳が代表的存在である。前者は直径20mを測る円墳で、長大な削竹形木棺と小型仿製鏡1面が検出されている。後者は全長35mの前方後円墳で、金銅装の冠、飾り太刀等が出土している。両古墳は、武庫川を挟んで対峙するような位置関係にあり、ともに流域左岸・右岸の首長墓と考えられている。

6世紀半ばになると、三田市域に横穴式石室が導入される。武庫川左岸地域では、横穴式石室を主体部とする古墳群が形成され、これ以前に盛行していた木簡直葬墳は姿を消す。中でも宮脇古墳群には、横穴式石室を主体部とする前方後円墳2基が築造されており、当該期の三田市域にあって中核的な位置を占めている。

これに対し武庫川右岸では横穴式石室の導入が遅れ、木棺直葬墳の築造が続くが、6世紀末には、西山古墳群第3号墳で横穴式石室が築造される。

7世紀に入ると、多くの古墳群で古墳の築造が終焉を迎え、市域中央部付近のみで築造が続く。萬代古墳群、青龍寺裏山古墳群、奈良山・西山古墳群などで、当該期の古墳が築造されている。またこの時期に西山古墳群、平方古墳群では、横穴式木室を主体部とする古墳が築造され、須恵器生産や鉄生産などに関わった集団の古墳と推定されている。



1 福島・長町遺跡(調査地点)	2 福島・長町遺跡	3 福島・龍王谷遺跡	4 普門寺址
5 大原・越ヶ谷遺跡	6 大原・藤南遺跡	7 萬代古墳群	8 福島・萬代遺跡
9 青龍寺裏山古墳群	10 福島・榮ヶ谷遺跡	11 戎山古墳群	12 城ヶ丘古墳群
13 平居山遺跡	14 福島古墳群	15 福島・切池遺跡	16 上龍島古墳群
17 福島・米谷遺跡	18 大原古墳群	19 大原・天神の尾遺構	20 大原・天神の尾遺跡
21 千ヶ坂古墳群	22 大原・千ヶ坂遺跡	23 千ヶ坂古墳	24 本谷西古墳
25 上野ヶ原古墳	26 大原・根坂遺跡	27 常聖寺址	28 貴志・下所遺跡
29 貴志古墳群第3号墳	30 貴志城居館跡	31 金性密院址	32 貴志城跡
33 福島・松ノ本遺跡	34 前中屋敷跡	35 奈良山遺跡	36 奈良山古墳群
37 西山遺跡	38 西山古墳群	39 西山西遺跡	40 下西山遺跡
41 平方古墳・平方窯跡群	42 平方遺跡	43 平方西遺跡	44 中西山古墳群
45 中西山遺跡・中西山城			

第2図 福島・長町遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000 兵庫県埋蔵文化財分布地図より作成)

【飛鳥時代～奈良時代】

7世紀末になると、現在の三田市中枢部にあたる屋敷町に、金心寺廃寺が建立される。律令期には、神戸市北部から三田市にかけての地域が、「有馬郡」として一体化されるが、このような統合の過程を象徴する遺跡と言えるかもしれない。

有馬郡の都衙については、神戸市北区の宅原遺跡がその推定地になっている。宅原遺跡では、「評」、「郷長」、「田主」ほかの墨書きがなされた土器、木彫面、人形その他の祭祀遺物などが出土しており、官衙的性格を強くうかがわせるものである。三田市域では、対中遺跡から銅製丸鞘が出土している。この時期の三田市域では、青龍川流域に末窯跡群が前代から続く生産をおこなっている。末窯跡群は、9世紀代には衰退し、これと歩調を合わせるように、相野窯跡群が成立する。その後も、市域での須恵器生産は12世紀代に至るまで継続された。

参考文献

三田市史編纂専門委員会 2010 『三田市史』考古編

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県阪神北県民局宝塚土本事務所が実施する、(二)武庫川支流大池川河川改良事業に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成22(2010)年度に、同事業所の事業計画に基づいて対象地の分布確認調査を実施した。この分布調査で、遺物が採集されたことと、事業地が周知の遺跡である福島・長町遺跡に隣接することから、平成23(2011)年度に、同事業所の依頼(神北(宝土)第1575号 平成22年9月8日付)に基づいて確認調査を実施した。この確認調査で、遺構の存在が明らかとなった範囲について、同年度に調査依頼を受け(神北(宝土)第1967号 平成23年4月25日付)、本発掘調査を実施した。

調査年度	調査番号	調査種別	調査期間	担当者	調査面積 (nf)
2010	2010001	分布調査	2010/5/12	渡辺昇・久保弘幸	3.0000
2011	2011006	確認調査	2011/4/11・12・14	別府洋二	44
2011	2011193	本発掘調査	2011/6/21～2011/7/8	渡辺昇・久保弘幸	245

第1表 福島・長町遺跡調査一覧

第2節 発掘調査の概要

(1) 分布調査

分布調査は、上記事業地を対象として、地表面の観察により実施した。調査対象面積は、3,000m²である。分布調査の時点では、地表面で観察可能な遺構は見いだされなかつたが、須恵器・土師器等の散布が認められたほか、事業地が、周知の遺跡(福島・長町遺跡)の隣接地であったため、確認調査を実施することとなった。

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

分布調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第1課 渡辺昇 久保弘幸

(2) 確認調査

確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、2m×2mの試掘坑11か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

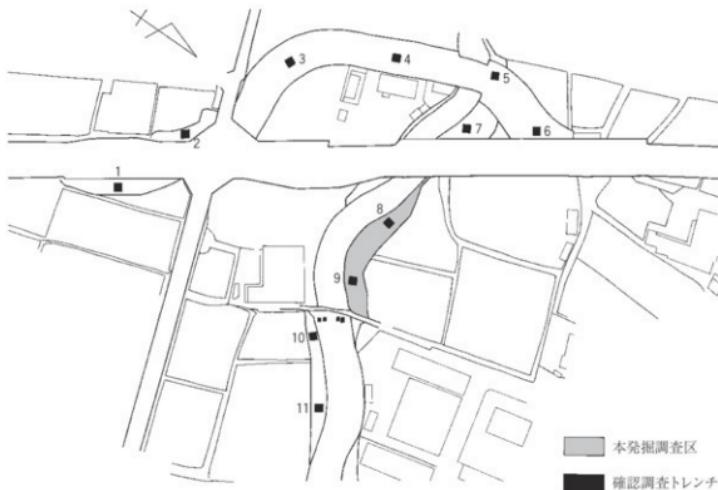
【調査の体制】

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第2課 別府洋二

確認調査の結果、試掘坑のうちトレンチ1・2では弥生時代までの遺物包含層が顕著に認められたが、聞いた側のトレンチ3～7では湿地性の堆積物に変化し、遺物量は減少する。トレンチ8・9では弥生



第3図 調査区位置図 (1/1,200)

時代の遺物包含層がよく残されており、トレンチ9では古墳時代と考えられる旧河道が検出された。トレンチ10・11では、遺物包含層は洪积砂によって遺物包含層は失われていた。この結果、確認調査対象地のうち、河道の付け替えによって破壊される294mについて本発掘調査を実施することとした。また遺物包含層が良好に残るトレンチ1・2付近については、工事にともなう簡易な仮設道路用地であり、遺構の破壊がないと判断されたため、本発掘調査はおこなわなかった。

なお、確認調査で出土した遺物のうち、主要なものについては、本報告書の第V章に収録している。

(3) 本発掘調査

【調査の体制】

平成21（2009）年度の調査

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第1班 渡辺 畏・久保弘幸

【調査の方法と成果の概要】

事業予定地は、大池川の現河道に沿ってほぼ東西に延びており、本発掘調査区は、延長約45m、最大幅約8mを測る。調査は、重機による表土掘削の後、遺物包含層以下を人力により掘削し、遺構検出作業を実施するという手順でおこなった。また遺構面の図化は調査担当者がおこない、あわせて写真撮影も実施した。

調査の結果、柱穴、土坑、溝等が検出された。ただし調査区全体として見ると遺構密度が低く、遺物包含層、および遺構内からの出土遺物がごく散漫であったことを考慮するならば、今回の本発掘調査区

付近は、福島・長町遺跡の縁辺部と判断される。

第3節 整理事業の概要

整理事業は、平成25（2013）年度に、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。整理事業は渡辺・久保の担当の下に、兵庫県立考古博物館において公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課、深江英憲がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。本製品および金属器の保存処理については、同課の岡本一秀が実施した。

また、本書に収録した遺物写真については、㈱クレアチオに委託して撮影を実施した。本製品の樹種同定については㈱古環境研究所に、放射性炭素14のAMSによる年代測定を㈱加速器分析研究所に委託して実施した。樹種同定の成果は本書第4章に、年代測定の成果は第3章末尾に、それぞれ収録している。なお、本報告書に収録した遺物、写真、図等については、すべて兵庫県立考古博物館に保管している。

第3章 遺構と遺物

第1節 本発掘調査区の層序と遺構面の位置

【本発掘調査区の位置】

本発掘調査区は大池川の北に隣接しており、東の丘陵から流下する大池川が、武庫川本流と合流する地点から約200m東に位置しており、北約100mには、東側から張り出す丘陵の尾根と、その先端の段丘面が見られる。

調査区の位置は、大池川の形成した沖積地が扇形の広がりを見せる場所の、ほぼ中央にある。兵庫県遺跡分布地図（兵庫県教育委員会 2011）および三田市史考古編（三田市史編さん委員会 2010）によれば、福島・長町遺跡は大池川の南岸に沿った微高地に、東西約500m、南北約350mにわたって広がっている。今回の本発掘調査区はその北側に位置しており、調査区付近の標高は154m、遺構面の標高は153mを測る。

【調査区内の層序と遺構面の位置】

調査区内では、表土層（水田耕土）以下にシルト～砂からなる厚い洪水堆積物が認められ、その間に古土壤層（遺物包含層）が挟まれている。調査にあたっては、上位からそれぞれ包含層1～3と呼称した。堆積物はいずれも、大池川の流下方向に沿って、東から西へごく緩やかに下がる傾斜を見せ、西側へ下がるほど、厚みを増す傾向が見られた（第4図）。

このうち第IV層（包含層1）は、シルト質の極細砂～細砂を主体とし、調査区東半部では細分できないが、西半部では2ないし3枚に細分され、層相から、水田土壤であったと考えられる。包含層1には、12～13世紀代に相当する中世前半期の遺物が含まれている。

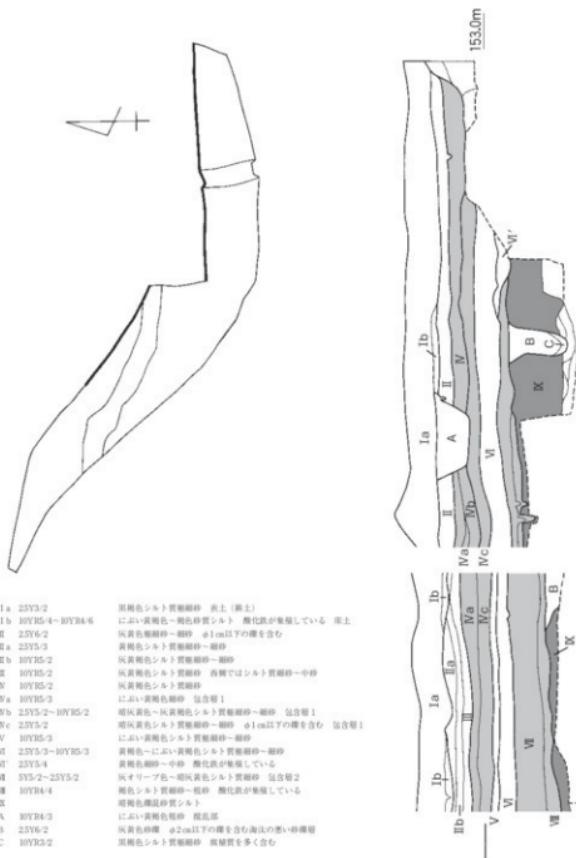
第V層（包含層2）は、シルト質極細砂～細砂を主体とする古土壤層で、一部で2層に細分される。

出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期と思われるものが多いため、7世紀前半に相当する須恵器の杯H身が出土しているので、第V層の堆積ないしは地表面を形成していた期間が、この時期を含むものと思われる。

第VI層（包含層3）は、シルトを主体とした低湿地性の厚い堆積物で、遺物の包含量は多くないが、弥生土器が出土している。この下位には、流水の影響を受けたと思われる砂・礫・シルトが交錯した堆積物が見られた（第X層）。

これらのうち、包含層2の直下（包含層3の上面）で遺構が検出された。遺構面は、層の堆積同様、東から西へ緩やかに傾斜して下がっており、調査区東半部では柱穴群が検出された。調査区のほぼ中央より西は、遺構が設けられた時期にも低湿地であったようで、検出面の色調も還元色を呈し、遺構も旧河道を除いてまったく見られなくなる。

こうした状況から、今回の本発掘調査区は、福島・長町遺跡の遺構分布範囲の北西端付近に位置し、ある時期にこれより西側では、確認調査の成果にも見られるとおり、複数の低湿地堆積物中に、縄文時代晩期以降、中世までの遺物が含まれるのであろう。推測ではあるが、これより西側は、大池川のみならず武庫川本流の氾濫原でもあるため、長期間、洪水の及びやすい環境に置かれていたものと思われる。



第4図 調査区地層断面図



第5図 調査区平面図 (1/200)

第2節 遺構と遺物

(1) 柱穴 (第5図)

【遺構】

柱穴は、調査区東半部の中央付近にまとめて検出された。直径20~40cmの不整円形~楕円形を呈しているが、いずれも柱痕は不明瞭で、柱穴の配置から建物跡を復元することもできなかった。また柱穴内からの出土遺物は僅少で、わずかに柱穴2から土師器とサヌカイト製石器が出土したにとどまる。

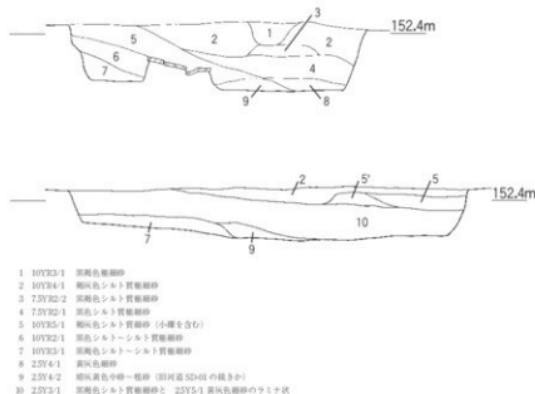
【遺物】

柱穴2から出土した土師質土器は、細片のため固形化し難く、器種も不明である。このほかにサヌカイト製の楔形石器（？）と剥片・碎片が出土している。第9図SIは、サヌカイトの楔形石器が破碎したと思われる資料である。隣り合う2側縁に顯著な潰れが認められる。他の縁辺は、打撃によって楔形石器が破砕した際に形成された、鋭利な縁辺である。

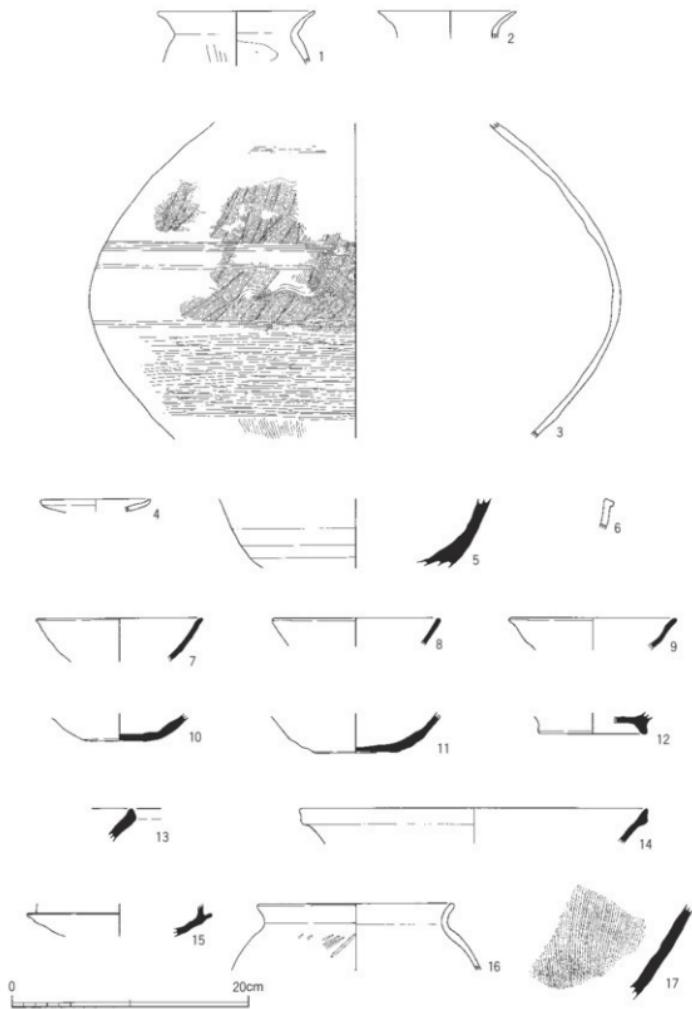
(2) 旧河道 (SD-1 第5・6図)

【遺構】

旧河道は、幅2m前後、深さ1m前後を測る。調査区東半から西半にかけて、蛇行しつつ延びており、それ自体は自然河道であったと推定される。溝内は淘汰の悪い砂礫で複雑に埋積されており、短期的な洪水で埋没したものと推定される。河道内からの出土遺物は僅少であったが、転磨を受けた土器類が出土している。また、調査区西部では、この河道内より板材と杭、矢板等で構築された護岸設備ないしは堤が、倒壊した状態で検出された。のことから、本来は自然河道であったものに、人為的な造作を加えることで水利をはかっていたものと考えられる。



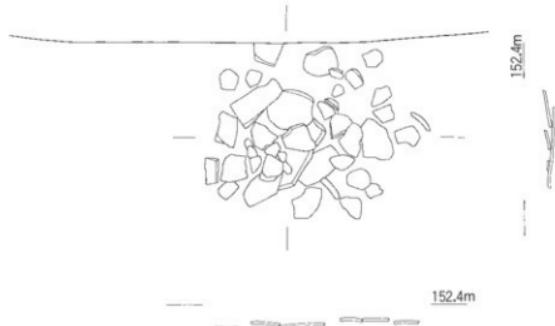
第6図 旧河道 (SD1) 斷面図



第7図 本発掘調査出土土器

【遺物】

河道理土からは、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・木製品が出土した。土器は細片が多く、図示できるものはわずか3点にすぎない。



第8図 遺構検出面上の土器出土状況

第7図1は、体部の膨らみの小さい、小型の土師器壺である。口縁部は外反しつつ開き、端部は厚みを減じて薄く終わる。体部外面には、板状の工具によるとと思われる、縱方向のナデが見られる。体部内面は、横方向のヘラケズリが施される。

2は壺の口縁部である。やはり外反しつつ開き、端部は厚みを減じて終わる。内外面はともにヨコナデが施される。

3は大きく膨らんだ壺の体部で、最大腹径付近とこれより上位に、櫛描波状文と直線文を施している。本個体は、旧河道上部と旧河道北側の検出面から出土したもの（第8図）が接合していることから、旧河道が埋没する過程の中で廃棄された可能性がある。

上記のほかに、わずか1点であるが杯かと思われる須恵器口縁部の細片が出土した。比較的精良な胎土を用い、器表面の調整も丁寧なものである。

第10図～第12図（W7・8、W10～15）は、河道内出土の木製品である。

W7は柱の一部ないしは杭であろう。表皮は遺存せず、図の裏面は破断面である。コナラ節の材を用いている。

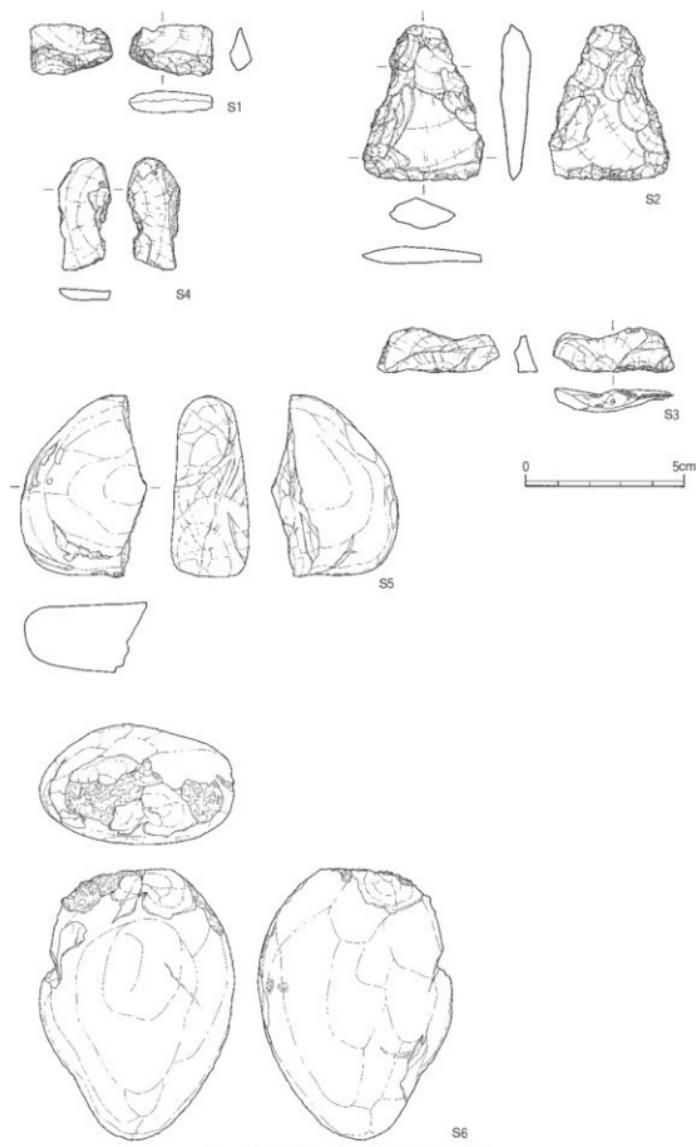
W8は角材である。四面ともに平滑に仕上げられている。両端は破損面である。

W10～W15は大型の材である。旧河道（SD1）内から、杭とともに出土しており、護岸あるいは堰のような構造物であったと判断される。

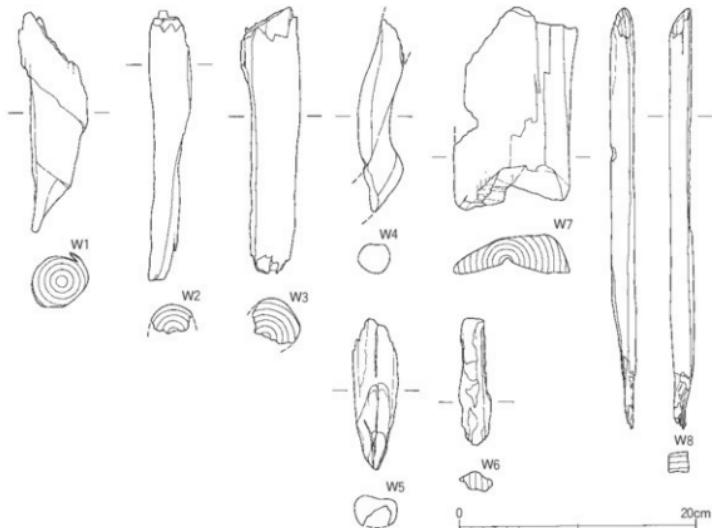
W10は角材である。表裏ともに平滑に仕上げられている。

W11は角材であろうか。やはり表裏とも平滑に仕上げられている。コウヤマキの材を用いている。

W12は板材である。図下端は尖るように仕上げられており、矢板として用いられたと考えられる。



第9図 本発掘調査・確認調査出土石器



第10図 本発掘調査・確認調査出土木製品(1)

W13~15は、検出時には、土圧によって縦方向に分割されていたが、本来は同一の材であったと考えられる。直径が60~70cmほどの、大型の丸木の内部を削り抜いた材であることから、本来は丸木舟であったものを、再利用した可能性が考慮される。W13の一端にはほぞ穴が穿たれているが、これが舟の構造に関係して穿たれたものであれば、丸木舟ではなく準構造船であった可能性もある。いずれも、片側の端部は斧ないしは鉈状の工具で、多数回切断・加工されている。また、内面の一部には炭化が認められる。コウヤマキ材を用いている。

(3) 不明遺構 (SX-3 第5図)

【遺構】

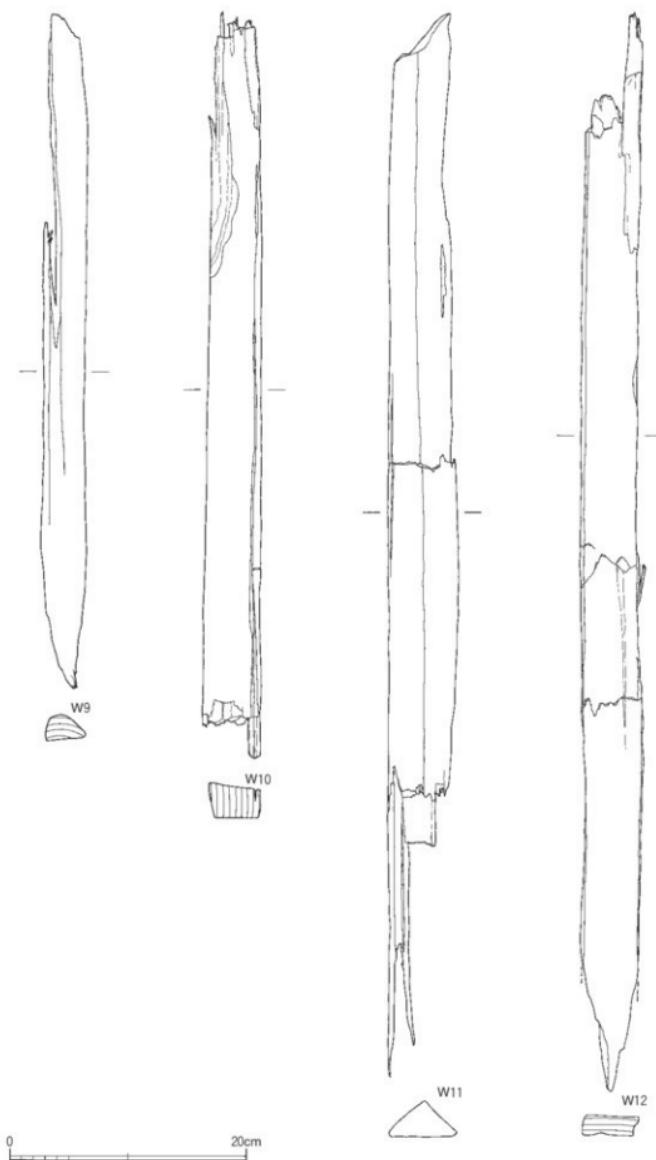
調査区中央付近の、南壁側から検出された遺構である。埋土内からは、土師器小皿が出土している。遺構の大半は調査区南側へ伸びていると思われる。不整形な土坑状を呈し、内部はシルト質の砂で充填されていた。埋土内からは散漫に遺物が出土しているが、土器は細片が大半を占めており、図示できるのは1点にすぎない。

【遺物】

第7図4は、土師器小皿である。底部を失っているが、外方へほぼ直線的に伸びる体部を見せ、口縁部はつまみ上げている。

W2~W6は、SX-3より出土した木製遺物である。いずれも破損、水磨を受けており、遺存状態は良好とは言いがたい。

W2・3は同一個体の遺物で、杭と思われる。樹皮が除去された丸太材である。



第11図 本発掘調査・確認調査出土木製品 (2)



第12図 本発掘調査・確認調査出土木製品 (3)

W4・5は不明木製品である。W4は両端が折れ、加工痕も観察できない。W5は内部が劣化し、半ば空洞状態である。一部に面取り状の加工痕が見られるが、尖端部は材の硬質部分が依存したもので、人為的加工ではない。

W6は付木とした。一端が焼けて炭化している。図下端部は、やや尖り気味に加工している。

(4) 溝 (SD-4 第5図)

【遺構】

調査区中央付近の南壁沿いに位置し、その大部分が調査区外にある遺構である。その形状から溝としつたが、SD-1同様、旧河道の可能性が高い。遺構内は砂ないしは砂礫で埋没していた。

【遺物】

土師器・須恵器が出土している。

第7図5は、須恵器壺体部下部である。内外面ともに回転ナデが施されており、底部直上の外面には、回転ヘラケズリが施されている。

(5) 包含層出土の遺物

第7図6～17、第13図18・19は、包含層出土の遺物である。既述のとおり、今回の本発掘調査では、上位より包含層1～3と呼称している。図示した遺物のうち、6～14は包含層1、15・16は包含層2より出土したものである。また、17・18は確認調査トレンチからの出土遺物である。

6は土師器の鉢である。口縁部はほぼ直立し、端部は外方につまみ出されている。器表面は摩滅が顕著で、調整痕は明らかではない。

7～11は東播系須恵器碗である。ゆるやかな膨らみをもって立ち上がる体部を見せ、口縁部は、そのまま丸くおさめるもの（7・8）、外反して終わるもの（9）がある。底部はいずれも回転糸切りである。12は須恵器杯身である。やや外方へ聞く形態の高台を貼り付ける。

13・14は、東播系須恵器鉢である。ほぼ直線的に聞く体部をもち、口縁部は、断面が方形に近いもの（13）と、上下に拡張されて外側に面を形成するもの（14）とがある。

15は須恵器の杯身である。内外面ともに回転ナデ調整が施される。底部は著しい灰かぶりのため、調整痕は観察できない。

16は土師器壺である。外反気味に短く聞く口縁部を見せ、体部は大きく膨らむ。口縁部内外面および体部内面はナデ、体部外面はタタキ目を施している。

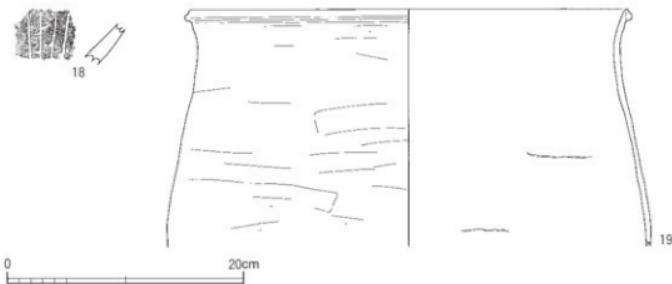
17は陶器擂鉢である。細かな撚描のころし目が施されており、内面には、ほぼ全体に自然釉がかかる。第13図は、確認調査時出土の土器である。

18は、陶器擂鉢である。おろし目はヘラ描である。

19は縄文土器深鉢である。口縁部直下に突帯を巡らせているが、器表面の劣化が著しく、刻みの有無は判別できない。頭部はほぼ直立しており、ごく緩やかに外反している。体部外面には、横方向に器表面を搔き取ったケズリ痕が認められる。内面は劣化が著しく、調整は不明である。トレンチ9の黒色シルト層より出土した。

このほか、図化はできなかったが、同じトレンチ9より、縄文土器の破片・脱落した突帯部などが出土している。

写真図版10上には、図示できなかった縄文土器の口縁部破片を示している。



第13図 確認調査トレンチ出土土器

【石器】

第9図は、確認調査、本発掘調査で得られた石器である。石材・計測値については、巻末の表に一括して掲載している。またS2~S6は確認調査時の出土である。

S1は、本発掘調査区の柱穴2より出土した楔形石器である。剥片を用い、その交わる2辺に顕著な剥離痕が並ぶ。

S2は縦型の石器であろう。全体に、三角形のヘラ状を呈するが、左図左側縁に抉りを入れて、基部を作り出している。刃部は表裏から二次加工が施され、直線的で厚みのある形状を見せる。

S3は楔形石器ないしは楔形石器から剥離された剥片である。薄い剥片を用い、その打面側縁辺に顕著な潰れが認められる。

S4は、やはり楔形石器であろう。一部に自然面をとどめる、薄い剥片を用い、その一縁辺に抉るような剥離が認められる。

S5は磨石であろう。河川の転運を用いているが、およそ中程で破碎している。

S6は叩石である。やはり河川の転運を用い、その一端で打撃をおこなっている。

【木製品】

第10図W1は、杭であろうか。器表面にはわずかに加工痕が認められるが、尖端部は水磨の結果材の硬質部が残ったもので、人為ではない。確認調査トレンチ8で出土した。

第11図W9は角材である。裏面は縦方向に削られている。確認調査トレンチ8で出土した。

なお、今回の調査で出土した炭化物等については、株式会社アーティクル・アンド・アソシエイツに委託して、AMSによる年代測定をおこなった。その結果、旧河道より出土した種実については、較正年代で1,722年±25年BP、弥生土器（第7図3）器表面に付着した炭化物が2,577年±25年BPというデータが得られた。

旧河道の年代は、 2σ の場合3世紀後半～4世紀末に含まれることとなり、最終的な埋没が古墳時代中期以降にかかる可能性を示した調査結果と、大きな矛盾はない。しかしそうした土器表面の炭化物については、土器から推定される年代との間に大きな乖離があり、何らかの形で古い炭素が混入した可能性がある。他の1点は、参考資料として分析したもので、4,120年±28年という較正年代は、想定された年代におさまっている。

第2表-1 収録遺物一覧表(土器)

収蔵番号	施因	地区	遺構	所位	種別	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	底径 cm
1	第7回	2区	SD-1	砂礫層	土器	壺	13.0	(4.5)		
2	第7回	1区	SD-1	砂礫層	土器	壺	11.5	(2.4)		
3	第7回	1区	SD-1	砂礫層	生土土器	壺			27.5	
4	第7回	1区	SX-3		土器	小壺	9.1	(1.0)		
5	第7回	1区	SX-4	下層黃褐色砂	須恵器	壺		(5.8)		
6	第7回	2区	包含層	土器	須恵器	鉢		(2.6)		
7	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	壺	14.0	(3.7)		
8	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	壺	13.8	(2.4)		
9	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	壺		(2.7)		
10	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	壺		(2.4)		
11	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	壺		(3.4)		
12	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	杯		(1.8)		
13	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	鉢		(2.8)		
14	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	鉢	29.0	(3.0)		
15	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	杯H身		(2.7)		
16	第7回	1区	包含層	土器	須恵器	壺	15.8	(5.6)		
17	第7回	1区	丸窓	土器	須恵器	蓋		(7.9)		
18	第13回	Tr-9	黑色シルト	陶器	壺	蓋鉢	(3.5)			
19	第13回	Tr-9	黑色シルト	陶土土器	壺	蓋鉢	36.8	(20.0)		
										ヘラ縁の32.3
										内面は黒色のため調整不鮮明
										内面は黒色のため調整不鮮明

第2表-2 収録遺物一覧表(石器)

収蔵番号	施因	地区	遺構	所位	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
S-1	第8回	Tr-10	P-2	柱穴土壙	楔形石器	石器	25.9	6.9	2.6	
S-2	第8回	Tr-10		井水砂洞	石器	石器	49.0	38.1	9.6	15.9
S-3	第10回	1区	SX-3	モミ属	楔形石器	石器	14.0	37.8	7.2	3.1
W4	第10回	1区	SX-3	モミ属	楔形石器	石器	35.0	16.3	3.2	2.4
S-5	第8回	Tr-2			新石	石器	53.0	32.2	3.2	161.0
S-6	第8回	Tr-2			叩石	石器	113.1	82.3	50.5	512.0

第2表-3 収録遺物一覧表(木製品)

収蔵番号	施因	地区	遺構	所位	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
W1	第10回	Tr-8		柱穴土壙	コナラ属ココナラ属	柱?	17.0	9.7	3.4	4.6
W2	第10回	1区	SX-3	モミ属	楕?	22.6	3.5	2.4		
W3	第10回	1区	SX-3	モミ属	楕?	22.1	4.0	3.8		
W4	第10回	1区	SX-3	モミ属	楕?	16.1	2.7	2.5		
W5	第10回	1区	SX-3	モミ属	楕?	12.7	3.5	2.5		
W6	第10回	1区	SX-3	モミ属	楕?	10.7	2.7	1.7		
W7	第10回	2区	SD-1	コナラ属ココナラ属	柱?	17.0	9.7	3.4		
W8	第10回	2区	SD-1	コナラ属ココナラ属	柱?	35.1	1.7	1.7		
W9	第11回	Tr-8			楕?	56.7	3.4	2.1		
W10	第11回	2区	SD-1		角材	62.7	4.3	3.0		
W11	第11回	2区	SD-1		角材	89.3	5.8	3.0		
W12	第11回	2区	SD-1		楕?	88.5	4.8	1.7		
W13	第12回	2区	SD-1	コウヤマキ	楕(舟材)	157.1	14.1	3.6		
W14	第12回	2区	SD-1	コウヤマキ	楕(舟材)	154.2	26.6	5.0		
W15	第12回	2区	SD-1	コウヤマキ	楕(舟材)	153.7	39.1	5.4		

第4章 自然科学的分析

第1節 福島・長町遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

本報告では、福島・長町遺跡より出土した木製品に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2. 試料と方法

試料は、福島・長町遺跡より出土した部材、矢板の木製品10点である。時期は古墳時代初頭、古墳時代後期、中世である。試料の詳細は結果とともに表Iに記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表Iに結果を示し、各断面の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表3表 福島・長町遺跡における樹種同定結果

明細番号	器種など	登録番号		結果(学名/和名)
1	部材	2011006	1	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc. コウヤマキ
2	部材	2011006	2	<i>Prunus</i> サクラ属
4	杭	2011193	2	Cupressaceae ヒノキ科
7	部材	2011193	5	<i>Abies</i> モミ属
8	杭	2011193	6	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属
13	部材	2011193	11	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
16	矢板	2011193	14	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc. コウヤマキ
18	矢板	2011193	16	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc. コウヤマキ
19	矢板	2011193	17	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc. コウヤマキ
20	矢板	2011193	18	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc. コウヤマキ

1) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晚材への移行はやや急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高のものが多い。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、そのうち、ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は寒帯に分布し、モミは温帯を中心で分布する。常緑高木で高さ45m、径15mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

2) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

3) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～12細胞高程度であるが、多くは6細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌で、耐朽性、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

4) ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はやや小型であるが型は不明瞭であり、1分野には1～3個存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがある。

5) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Primus* プラ科 写真

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で彈力に富み、建築材などに用いられる。

6) サクラ属 *Prunus* バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは主に2～3個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在し、内腔には着色物質が見られる。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

4. 考察

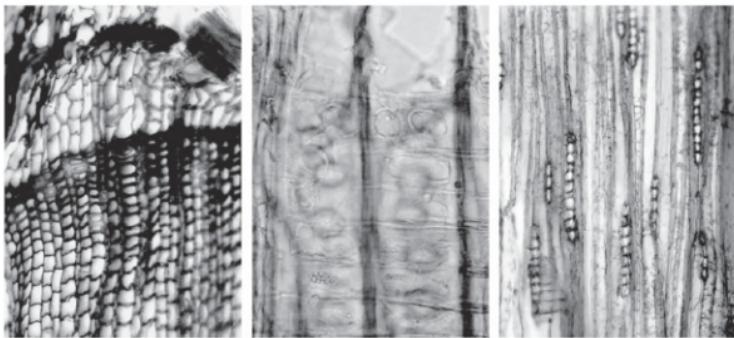
同定の結果、福島・長町遺跡の木製品は、コウヤマキ5点、モミ属1点、マツ属複維管束亜属1点、ヒノキ科1点、コナラ属コナラ節1点、サクラ属1点であった。コウヤマキが多く、部材、矢板に使用されており、木理通直、肌目緻密で、特に耐湿性に優れ、針葉樹の中では最も加工のしやすい材である。モミ属は部材に使用されており、材は耐久性、保存性は低いが、軽軟な事から加工が容易な木材である。マツ属複維管束亜属は杭に使用されており、木理おおむね通直で肌目は粗く、水湿に良く耐える材である。ヒノキ科は杭に使用されており、木理おおむね通直で肌目緻密、大きな材が取れる良材である。コナラ属コナラ節は部材に使用されており、強靭で弾力に富む材である。サクラ属は部材に使用されており、概して堅硬な材である。

コウヤマキ、モミ属、マツ属複維管束亜属、ヒノキ科は、温帶に広く分布する常緑針葉樹であり、いずれも高木となる。なおモミ属には温帶性と亜高山性の樹種があり、温帶性のモミと考えられる。コナラ属コナラ節、サクラ属は温帶を中心に広く分布する落葉広葉樹である。その内コナラ属コナラ節は陽当たりの良い山野に生育し、ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。サクラ属は排水の良い斜面等に分布する。以上から福島長町の木製品の樹種は、当時遺跡の周辺、もしくは時期によっては流通によってもたらされたとみなされよう。

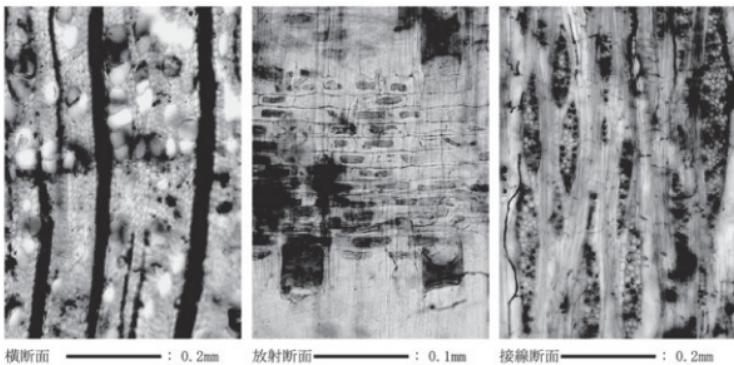
参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
鳥地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242.

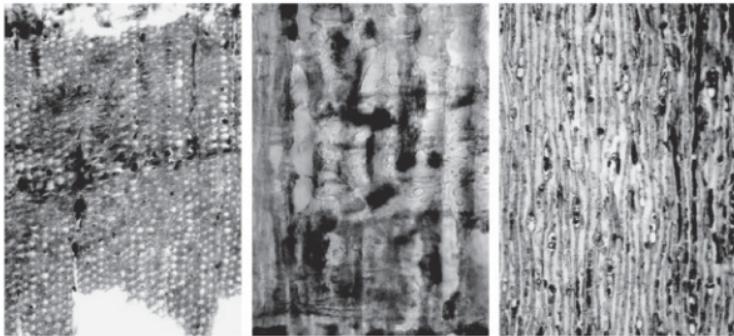
福島長町の木材 I



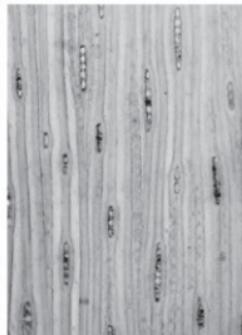
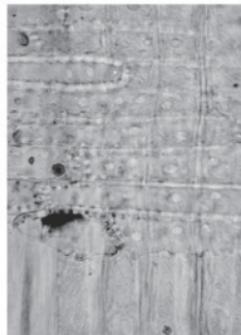
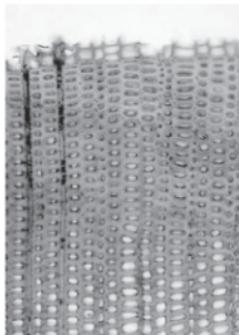
横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
1. 明細番号 1 部材 コウヤマキ



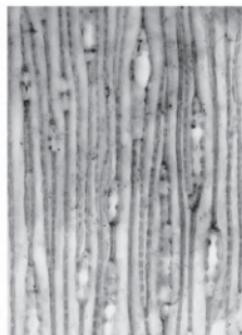
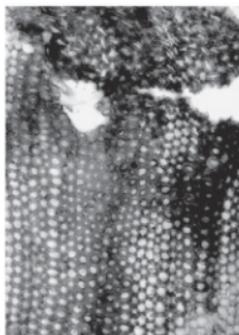
横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
2. 明細番号 2 部材 サクラ属



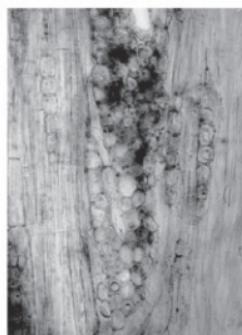
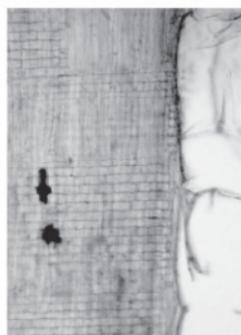
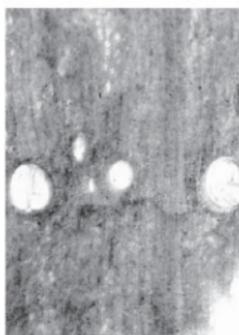
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
3. 明細番号 4 杭 ヒノキ科



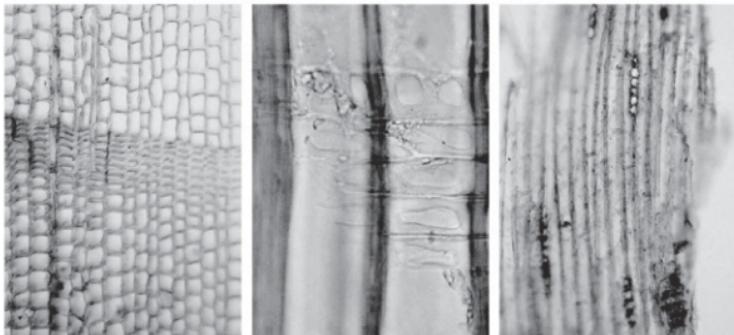
横断面 放射断面 接線断面
0.2mm 0.05mm 0.2mm
4. 明細番号 7 部材 モミ属



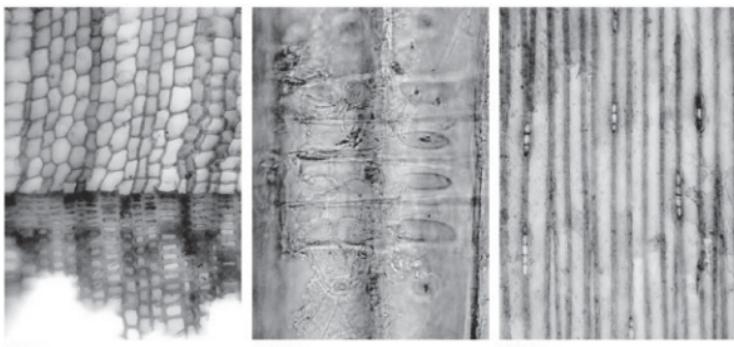
横断面 放射断面 接線断面
0.2mm 0.05mm 0.2mm
5. 明細番号 8 杭 マツ属複維管束亞属



横断面 放射断面 接線断面
0.5mm 0.2mm 0.1mm
6. 明細番号 13 部材 コナラ属コナラ節



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
7. 明細番号16 矢板 コウヤマキ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
8. 明細番号18 矢板 コウヤマキ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
9. 明細番号19 矢板 コウヤマキ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
10. 明細番号20 矢板 コウヤマキ

第5章 結語

今回の本発掘調査区では、3層の遺物包含層が検出され、弥生時代中期から中世（鎌倉～室町時代）にわたる遺物が出土した。またこの間に、遺構面1面が検出された。

堆積物の様相からは、いずれの時期においても調査区付近は比較的低湿で、洪水の影響を受けやすい環境であったものと思われる。

最上位にある第IV層（包含層1）からは、鎌倉時代を前後する時期の遺物が出土している（第図6～14）。須恵器にも弱い摩耗が見られることと、出土した包含層の層相を併せて考慮するならば、この時期には調査区付近は広く水田化されていたと考えられる。

第Ⅲ層（包含層2）からは、主に弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土している（第7図16）。これは、包含層2の直下に検出される旧河道から出土した土器類（第7図1・2）とも概ね符号する。しかしわずか1点ながらTK209型式の須恵器杯H身が出土している（同図15）。ほか、旧河道内からも須恵器の細片が出土している。ごく少数の出土であるため、その扱いに苦慮するところであるが、いずれも上層からの明瞭な混入の痕跡を把握することができなかったため、一応、包含層2は古墳時代後期に形成されたと考えておきたい。この第Ⅲ層下の第Ⅳ層上面が、遺構検出面となっている。

遺構は、調査区東半の一部にまとまって分布しており、旧河道を除くと、西半には分布しない。これは、調査区西半が長期間低湿地の状態であったためであろう。調査区東半には、わずかながら微高地が形成されており柱穴が分布しているが、明瞭な規格性をもった遺構の配置などは看取することができなかった。これは、調査区の狭小さに主因があろうが、それだけでなく、調査区付近に存在した構造物が、長期間使用されるような規模や規格性をもつものではなかった可能性も指摘しうる。その根拠として、柱穴の深さを挙げることができる。今回検出された柱穴は、深さ10cm～20cmとごく浅いものである。遺構面を覆う包含層2の状況からみて、遺構面が削平されたとは考えられないことから、この柱穴群は恒常的な建造物に伴うとするよりも、仮設的な建造物を想定した方が理解しやすいだろう。

旧河道の成立時期は不明であるが、埋土中より弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が目立つことから、この時期には河道として機能していた可能性がある。また、埋土から古墳時代と思われる須恵器の細片が出土していることと、直上を覆う包含層からも古墳時代後期後半の須恵器が出土していることから、埋没の最終段階はこの時期にかかると考えておきたい。

遺構面を形成する第Ⅳ層は、それ自体が弥生土器を包含する（包含層3）。しかし、その密度はごく低いものであり、包含される土器も細片であることから、現在の大池川を挟んで南に広がる福島・長町道路の中核部からの流入などによる堆積が想起される。

確認調査のトレンチ9の黒色シルト層からは、縄文時代晩期の遺物が出土した。口縁部外面に1条の突帯を巡らせる深鉢で、その器形から、晩期末葉の長原式に属するものと考えられる。遺物は黒色シルト層に包含されていたとされている。このことから、低湿地堆積物中に包含されていたと判断される。

縄文時代晩期の遺物は、三田市域では対中遺跡でのわずかな細片の出土例が知られているにすぎない。突帯文土器の時期は、稲作農耕、大陸系磨製石器の導入など、弥生文化の要素が出現する時期でもあることから、今回の出土例は注目に値する。今後の調査の進展を待ちたい。

【参考文献】泉拓良 1990「西日本凸帯文土器の編年」「文化財学報」8集



本発掘調査前の状況（東から）



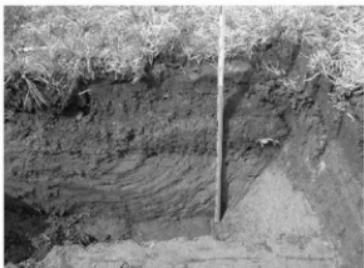
本発掘調査前の状況（西から）



確認調査トレンチ 1



確認調査トレンチ 2



確認調査トレンチ 3



確認調査トレンチ 6



確認調査トレンチ 7



確認調査トレンチ 9



確認調査トレンチ 10



確認調査の状況



調査区東半部（1区）全景



調査区西半部（2区）全景



調査区北壁断面



調査区南壁断面



1区旧河道 (SD-1)



2区旧河道 (SD-1)



遺構検出面土器出土状況



遺構検出面土器出土状況（下半）



旧河道内の木造構造物



木造構造物細部



木造構造物細部



木造構造物検出状況



人力調査状況



人力調査状況



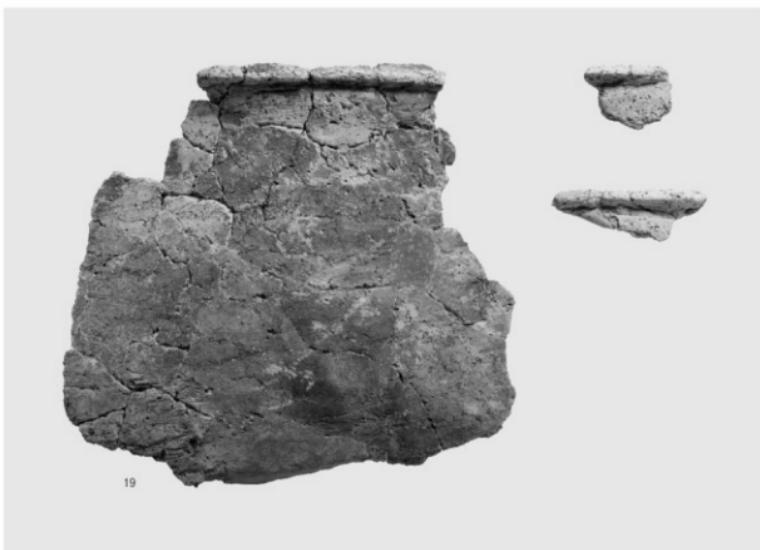
木造構造物検出状況



断面図化状況

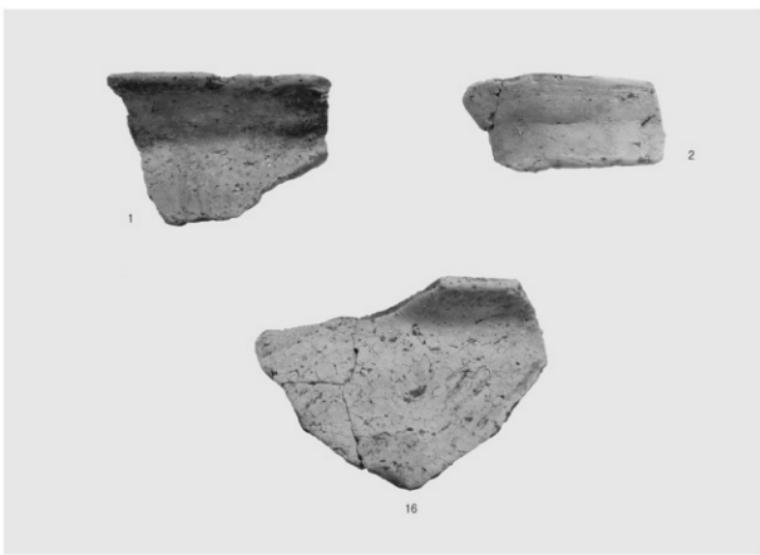


埋め戻し状況



19

20

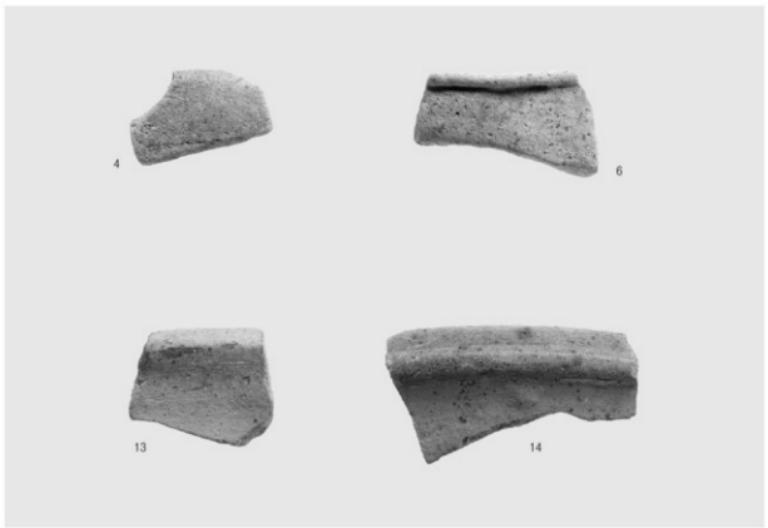


16

出土遺物（土器）



3



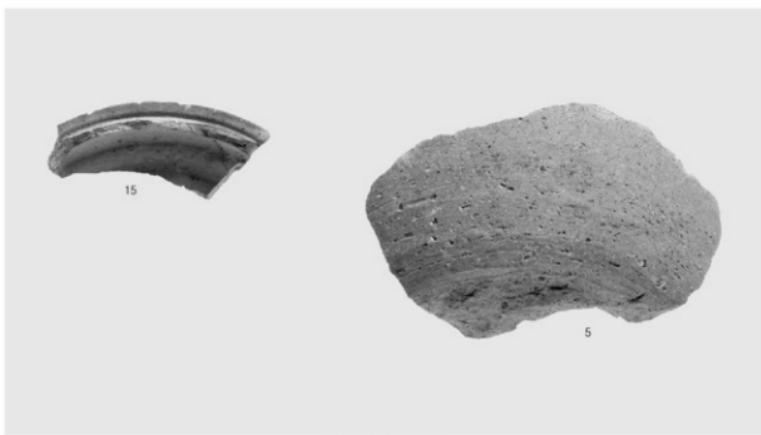
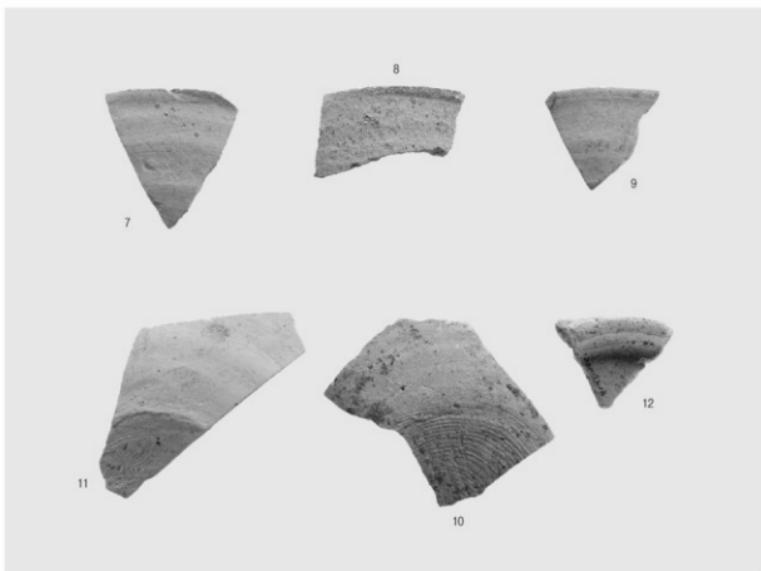
4

6

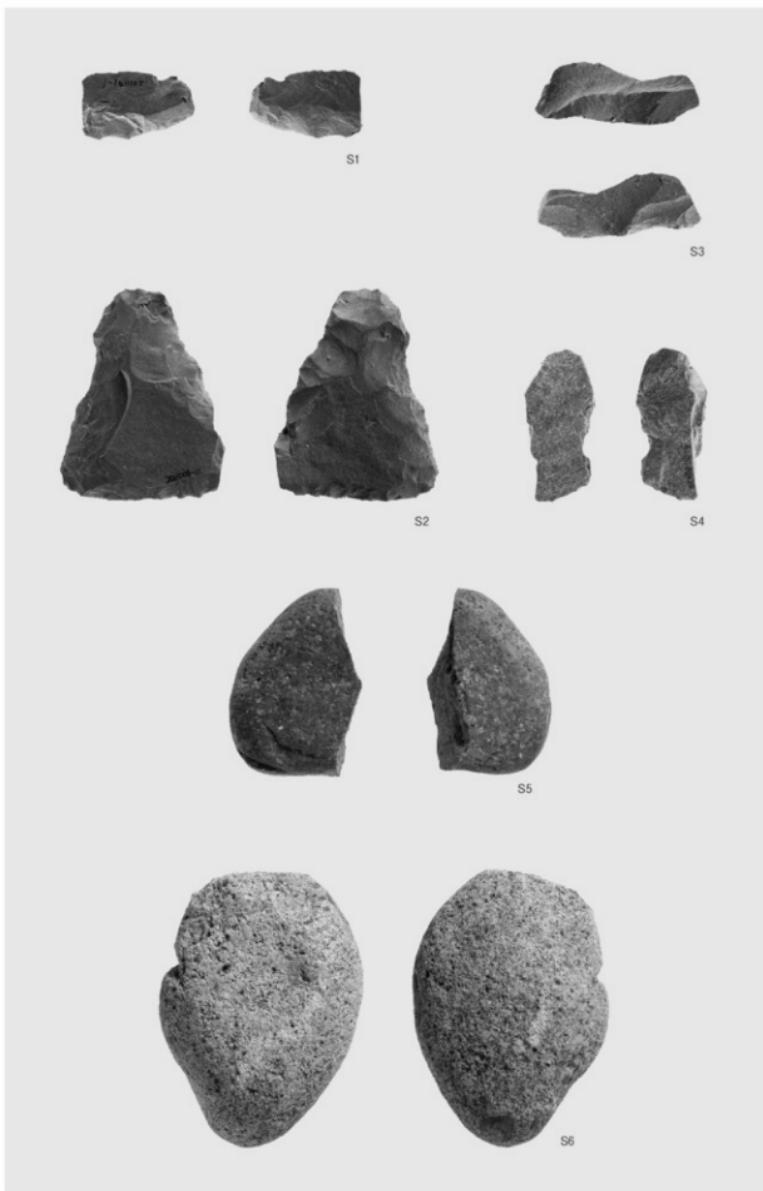
13

14

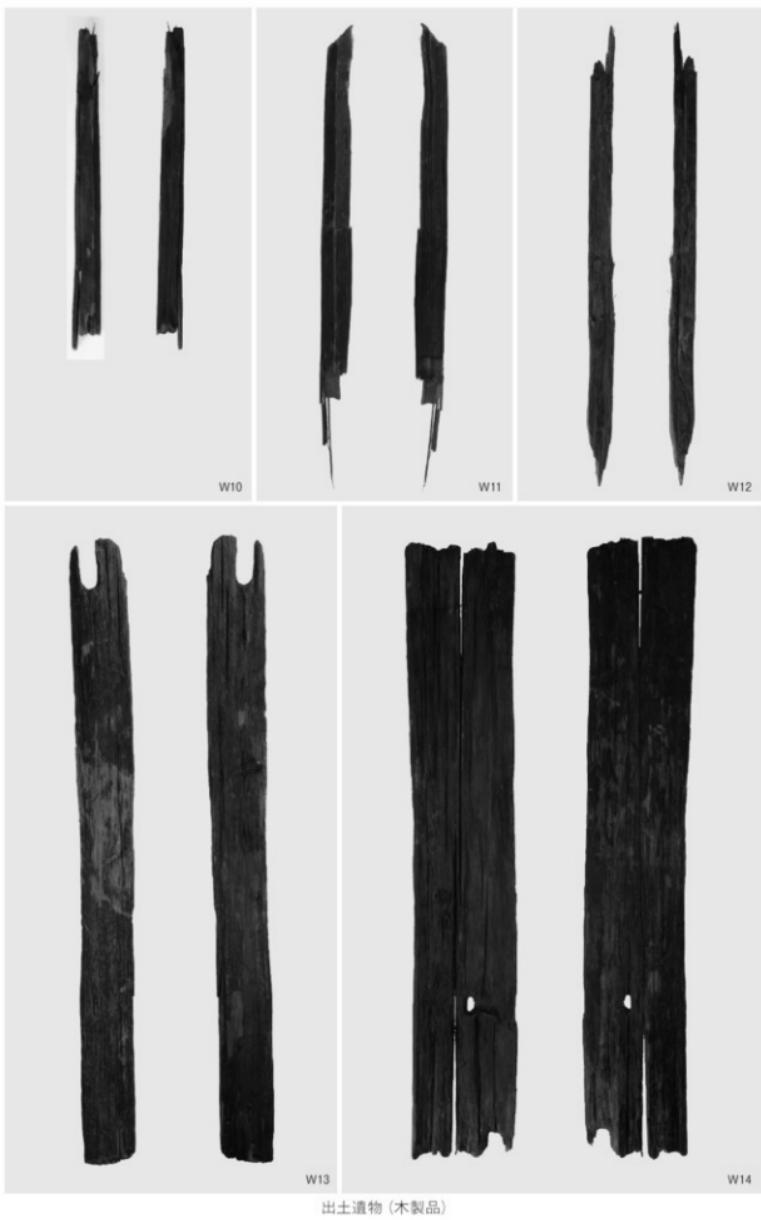
出土遺物（土器）



出土遺物（土器）



出土遺物（石器）





W15

出土遺物（木製品）

兵庫県文化財調査報告 第459冊
三田市

福島・長町遺跡

-(二)武庫川水系大池川河川改良事業に伴う発掘調査報告書-

2014(平成26)年3月31日 発行

編 集 公益財團法人兵庫縣まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 デジタルグラフィック㈱
〒650-0043 神戸市中央区弁天町1-1
